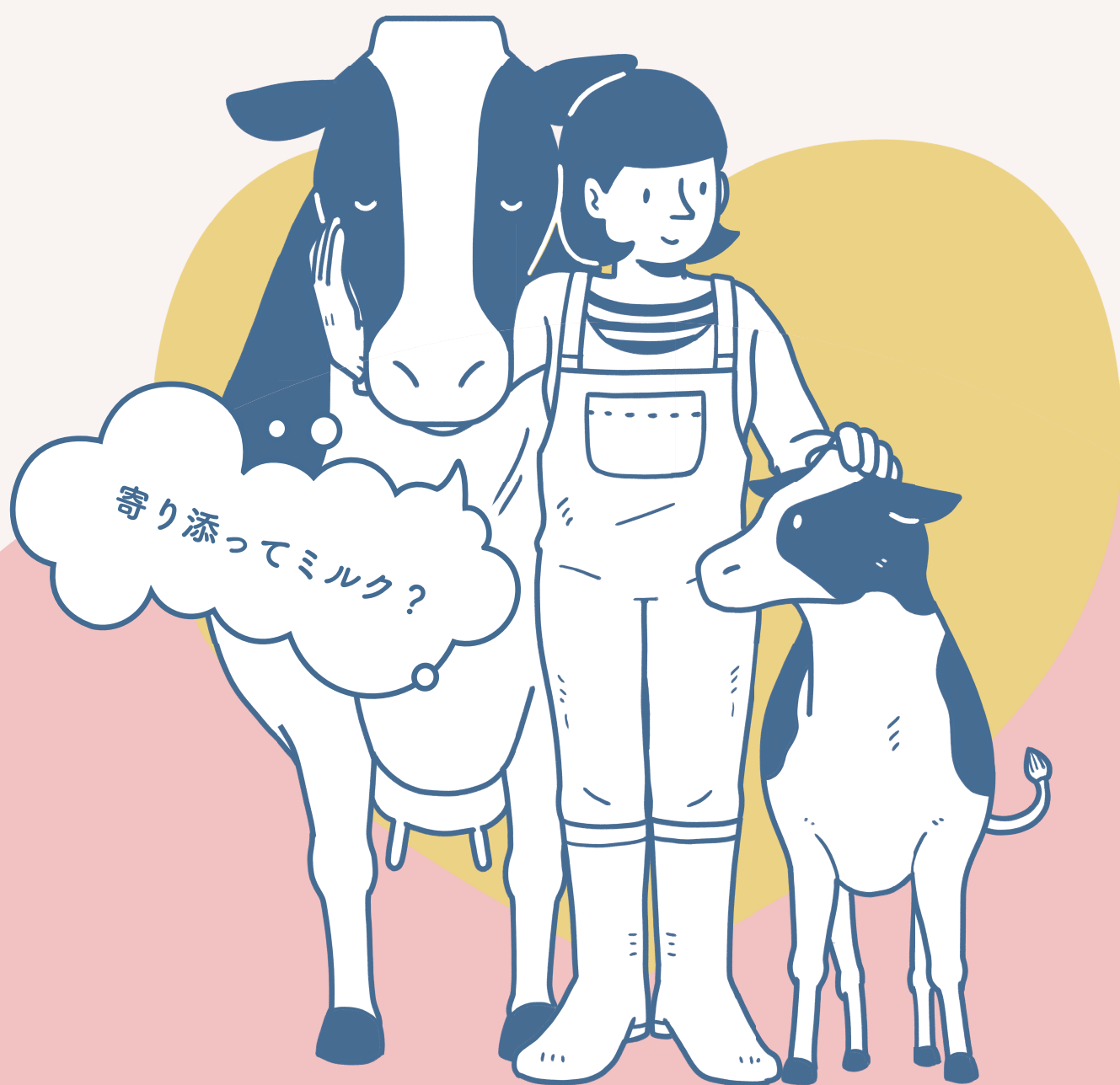


ウシとの共生で得られる いのちの恵み"ミルク"



point
01

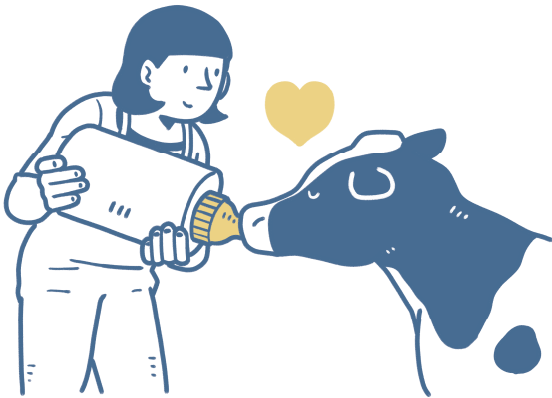
1万年前にミルク利用を「発明」 人類の発展に大きく影響。

人類が、人間以外の哺乳動物のミルクを食料として利用するようになったのは、今からおよそ1万年前。それまで人類は、狩猟により食料を獲得してきましたが、食料資源には限りがあるため、定住した生活ができませんでした。しかし、哺乳動物からミルクをしぼる「搾乳」を発見し、それを食料として利用することで、定住生活や農耕ができない乾燥地帯での生活も出来るようになりました。「搾乳」の発見は、文明や人類社会の発展にとって、大きな「発明」と言われています。



point
02

人類が動物の子育てに寄り添い、 「共生」しながら、食を得る手段に。



人間と一緒に暮らす牛や山羊、羊などの哺乳動物の中には、子どもにも上手に母乳を与えられない母親がいます。自分の子ども以外に母乳を与えないのが野生動物の本能ですが、人類は野生動物の子育てに介入することで、搾乳技術を身に付け、他の動物のミルクを食料として利用させてもらうことへと発展しました。つまり、現代における酪農は、人間が他の動物の命に寄り添う「共生」によって食料を獲得するという手段を手に入れたことになります。

牛の生活に寄り添う酪農家

point
03

ミルクを食生活に取り入れ、 持続可能な社会を実現。

今や「酪農」は世界中に広がり、一年間で生産されるミルクの量は世界で8億トン、牧場の数は世界で約1億戸に上ります。それらの牧場では、牛の妊娠や出産、子育てなどを手伝い、「いのち」に寄り添うことで乳生産を行います。牛の命や生活を支え、牛からミルクをいただく関係が持続可能な人類の発展を支えており、他の生き物の存在に感謝する気持ちが大切です。

